

用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。

用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであつて、それを客に示すべきものではない。その心入れがどこにあるのか気づかれないまでに細心でなければならないまい。

どこに用意があるのかも心づかせず、全く自分達の心からのように、その用意を受けさせてこそ、客をもてなすというものである。もてなしの上手とはいふべきものである。その上手な趣向に誘われて、客は時の移るのも、もてなされていることも忘れてくる。客の幸福これに如くはない。主人の喜びもまたこれに過ぐるはない。

これ、すべて、人が人に対する常道である。教育もまた同じ。

つぎめを貴ぶのは、練絹だけではない。われめ無きを賞ずるのは、青玉に限らない。何ものにも渾然として完きを美とするからである。断片と破片と、いくらそのひとときれひとときれが美しそうでも、ついに完きを味わい難い。まして、何を苦しんで、求めて、完きものを裁ち、こぼつことをしよう。

生命を貴び、自然を愛するものは、故意と作為とを嫌い、一切のわざとらしさを忘む。そこには、他の何ものを得ても、貞を失うからである。まして、何のために、強いて、生命を傷つけ、自然を害うことを企てよう。

美と貞を軽んじて、なんの正しい教育工夫があろう。

倉橋惣三選集 第三卷

(幼稚園保育法真諦初版の扉より)